

〔生薬学雑誌, 33, 130 (1979)〕

Comparative Cultivation Studies of the Original Plants of Mai-Men-Tung

TOSHIHIRO TANAKA, MIZUO MIZUNO, YUKIO NORO*

麦門冬基原植物の比較栽培研究

田中俊弘, 水野瑞夫, 野呂征男*

本参考文献的に正条な麦門冬基原植物は *O. chekiangensis* であるが, 日本で栽培した場合の有用性は明らかでない。日本産の *O. japonicus* ジャノヒゲ (草地) と *O. japonicus* var. *caespitosus* カブダチジャノヒゲ (森林) とには棲み分け現象が認められている。これらを明らかにする目的でこれらを同一条件下で比較栽培をした。

自生地の状況をできるだけ再現する目的で夏期に相対照度10%, 冬期に50%とした陰地条件と陽地条件 (100%) との2実験区を設けた。他の栽培条件は麦門冬栽培の常法に従った。材料として *O. chekiangensis* の他ジャノヒゲ, カブダチジャノヒゲ, *L. platyphylla* ヤブランを使用した。

現存量 (g/m^2) は両条件下で違いは認められなかった(ヤブランを除く)。いずれの種についても陽地条件では地下部が, 陰地条件では地上部重量が大であった。5月の収穫期における地下部への分配率の点では, 陽地条件では根の細い部分への分配率が大であった。一方, 陰地条件では根の肥大部 (Tuberoïd, 麦門冬になる部分) への分配率が大となった。特にジャノヒゲでは40%にも達した。その他陽地条件の値を1.00とした場合の各要素の値を Table 1 に示す。すなわちカブダチジャノヒゲはジャノヒゲに比較して陰地条件下で強い影響を受けることを示すことができた。これは両者の自生地の違いを裏付けるものである。

常法による麦門冬収穫量はジャノヒゲで $109.4\text{g}/\text{m}^2$ (陰地条件), *O. chekiangensis* (同条件) で118.1であった。なお生産地での収穫量が $75\text{-}170\text{g}/\text{m}^2$ である。これらの事実を考え併わせると中国から導入した *O. chekiangensis* は麦門冬生産のために充分使用に耐えるものである。

Table I Comparative Table on the Reaction to the Shade Condition

	<i>O. japonicus</i>	<i>O. japonicus</i> var. <i>caespitosus</i>	<i>O. chekiangensis</i>	<i>L. platyphylla</i>
Tuberoïd/leaf	1.99	1.24	1.18	0.84
Root/leaf	0.52	0.74	0.56	0.33
New organ	0.72	1.06	0.49	0.53
Ramification	0.52	0.88	0.44	0.79

* 名城大学薬学部